

舞阪町天白遺跡 2 次

2013 年 3 月

浜松市教育委員会



例　　言

- 1 本書は静岡県浜松市西区舞阪町舞阪 108 で行った舞阪町天白遺跡の発掘調査報告書である。この調査は、浜松市立舞阪小学校における放課後児童会施設建設に先立ち実施した。調査は、浜松市（こども家庭部次世代育成課）の依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行った。なお、舞阪町天白遺跡については、2007 年に本発掘調査がなされている。のことから、今回の調査を 2 次調査とする。
- 2 調査にかかる経費は、全額浜松市が負担した。
- 3 当該地に関わる確認調査は 2012 年 6 月 28 日に実施した。
- 4 本発掘調査は 2012 年 8 月 3 日から 2012 年 8 月 20 日の間に実施した。調査面積は約 237m²である。
- 5 現地発掘調査は影山重広（浜松市文化財課）、川西啓喜（浜松市文化財課非常勤職員）が担当した。
- 6 整理作業は川西啓喜が担当し、藤森紀子・水島絵理（浜松市文化財課非常勤職員）の補助を得た。本書の執筆は川西啓喜が行った。
- 7 調査の記録、出土遺物は浜松市市民部文化財課が保管している。
- 8 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 9 土層・土器の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。
- 10 遺構の略記号は以下のとおりとする。

SK：土坑 SD：溝 SP：小穴

目　　次

例　　言

第1章 序　論	1
第2章 調査成果	4
第3章 総　括	12

図　　版



第1図 舞阪町天白遺跡の位置

第1章 序論

1 調査にいたる経緯

舞阪町天白遺跡は、静岡県浜松市西区にある浜松市立舞阪小学校を中心に展開する遺跡で、かつては舞阪小学校遺跡と呼ばれていた。小学校の北東側の道路において、1991年2月に実施された下水道埋設工事で弥生土器が出土したことが当遺跡の発見契機となった。弥生土器は中期後葉の壺で、ほぼ完全な形で出土した。完全な壺が単体で出土するのは、当地が方形周溝墓など弥生時代の墓域であった可能性を示唆するものである。

2007年になり、舞阪小学校において、地震対策の一環として校舎が新築されることになり、建設予定地に遺跡が及んでいるのかを把握するために確認調査が実施された。その結果、竪穴住居跡などの遺構が確認された。こうした結果を受けて、2007年7月31日～10月31日にかけて本発掘調査（1次調査）が実施された。本発掘調査の結果、古代の竪穴住居跡などの遺構が数多く確認され、舞阪町天白遺跡において古代の集落が展開していたことが明らかになり、また、弥生時代中期～中世にかけての複合遺跡であることとも判明した。

2012年になり、浜松市こども家庭部次世代育成課によって、舞阪小学校の校庭の南東隅において放課後児童会施設の建設が計画された。対象地は、1次調査区から約100m東にあたる。この計画に伴って2012年6月28日に確認調査を実施し、土坑内から弥生時代中期の壺が出土した。こうした確認調査の結果を踏まえ、遺跡の取り扱いについての事前協議がなされた。その結果、建設予定の建物の基礎工事によって遺跡の保護が図れないことが明らかとなり、施設建設地の全域にわたって、本発掘調査を実施することになった。

本発掘調査は、浜松市（次世代育成課）の依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）が実施した。現地調査は2012年8月3日から8月21日にかけて実施した。調査対象面積は約237m²である。



第2図 確認調査区完掘状況



第3図 SK04 土器出土状況

2 舞阪町天白遺跡をめぐる環境

地理的環境 浜松市南部の地形は、三方原台地を中心に、北に明石山系の山々と都田川平野、東に天竜川平野、南に海岸平野、西に浜名湖が広がっている。西区舞阪町は、浜名湖の湖口部東側に位置し、浜松市南部の海岸平野に属し、町域全てが砂堤上にある。

浜名湖は、かつて都田川が形成した谷で、20,000年前には現浜名湖口から10km以上南で、海に注いでいたと考えられている。そして、12,000年前頃から始まった海面上昇により、浜名湖は溺れ谷となり、現在の浜名湖の原型が形成された。海水面は5,000～6,000年前には、現在よりも2～3m高い水準に達したが、その後、気温が低下するのとともに海は後退していき、2,000年前頃には、現水面下2～3mの水準まで下がった。海岸には天竜川から供給された砂が、季節風や海流及び海退の進度など、微妙な関係から幾筋もの砂堤列を形成し、これらの砂丘と砂丘の間には湿地帯（砂堤列間低地）が広がっている。

砂堤列は、現雄踏街道が1番目の砂堤列にあたり、現在の中田島砂丘を含めて、8条東西方向に延びていることが確認されている。砂堤列と湿地帯は、三方原台地南方では明瞭だが、篠原町以西では、3列目もしくは4列目以南が合一してしまい、西方の浜名湖に接して終わる。これは、舞阪と雄踏との間を流れる新川の影響や、天竜川から放出される砂の量または海流に大きく左右されたためと考えられる。

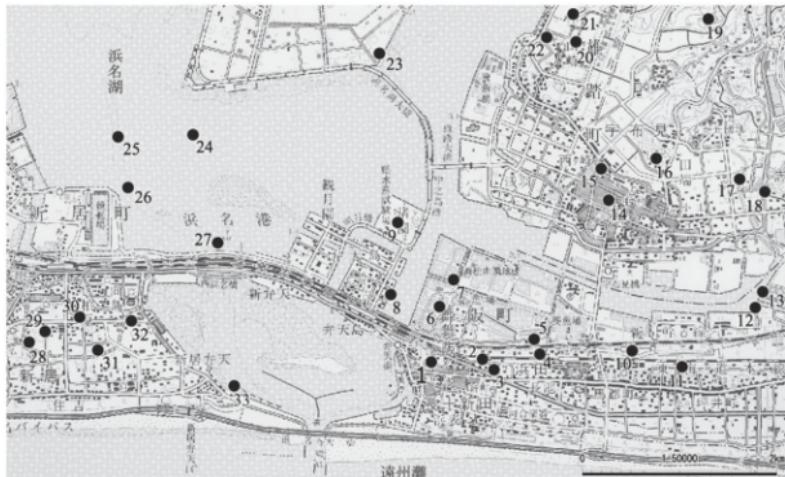
歴史的環境 舞阪地区とその周辺においては、渚園遺跡・ゼゼラ遺跡・スモテ遺跡・村櫛海水浴場沖遺跡などから縄文時代中期の土器や石器が出土している。この頃から、舞阪地区は人々の住むことが可能な環境化にあったと考えられる。

弥生時代になると、海岸平野上において集落が営まれるようになる。さらに、弥生時代中期中葉になると中核的な集落が営まれるようになり、本格的な農耕社会に入る。これは、弥生時代前期から中期にかけての海退によって、砂堤列間の低湿地帯に粘土層の堆積が進行して、農耕の定着にとって有利な条件が働いたためと考えられる。砂堤地帯に位置する舞阪地区においても、水田を営むことができる環境にあったと考えられる。この時期の舞阪地区における遺跡は、弁天島湖底遺跡や大山遺跡がある。弁天島湖底遺跡は、弥生時代中期後葉に盛行して当地域の中核的集落として、古墳時代まで存続していく。

舞阪地区における古墳時代の集落遺跡では、弥生時代より続く弁天島湖底遺跡などが挙げられる。その一方で、舞阪地区では現在まで古墳は確認されていない。また、舞阪町天白遺跡では、1次調査の結果から飛鳥時代～奈良時代にかけての集落が発見され、多くの堅穴住居跡や掘立柱建物跡が確認された。

奈良・平安時代において、舞阪地区は敷智郡に属していた。律令時代の遠江国には猪鼻・栗原・□摩・横尾・初倉の5つの駅が存在したことが『和名類聚抄』の記載から分かっている。舞阪地区は、猪鼻駅と栗原駅の中間に位置し、現在と同様に、東海道に面していたと考えられる。古代東海道は浜名湖北岸を通ったとする説もあるが、南部海岸平野の砂堤列に沿い、古代官道が整備されていた可能性は高い。

舞阪地区における鎌倉時代の遺跡では、舞阪町天白遺跡・西浜名橋北遺跡・碇瀬西遺跡・新居弁天沖遺跡で遺物が採集されている。舞阪町天白遺跡以外の3遺跡は湖底遺跡であり、中世前半まで集落が形成されていた可能性が高い。なお、鎌倉時代以降の遺物は、現在、新居弁天沖遺跡以外の湖底遺跡では確認されていない。



1 舞阪町天白遺跡	弥生・奈良・鎌倉	12 坪井町新川河口	奈良・鎌倉	23 村瀬海岸遺跡	绳文(後)
2 亀ヶ原遺跡	弥生・古墳(後)・古代	13 稲原町新川河口	弥生(中)	24 村瀬海水浴場沖遺跡	绳文(中～後)
3 白石山遺跡	弥生(中)	14 九郎平屋敷古墳	古墳(後)	25 ゼゼラ遺跡	绳文～中世
4 大山Ⅰ遺跡	弥生(中)・吉墳(後)	15 白山神社遺跡	古墳(後)	26 スモテ遺跡	绳文・弥生・鎌倉
5 大山Ⅱ遺跡	古代	16 西之谷公園内古墳	古墳(後)	27 西浜名橋北遺跡	绳文～古墳・中世
6 吹上西遺跡	古墳	17 鹿小路遺跡	弥生(後)・古墳(前)	28 御殿下遺跡	古代・中世
7 吹上北遺跡	弥生	18 西脇遺跡	弥生(後)～古墳(前)	29 念仏寺遺跡	古代～近世
8 弁天島湖底遺跡	弥生・古墳	19 大尻遺跡	古墳	30 元新居遺跡	古代～近世
9 游園遺跡	绳文(中)	20 中薄遺跡	弥生(後)・古墳	31 御代官屋敷遺跡	古代～近世
10 北浦遺跡	古代～中世	21 大ワゴ遺跡	古墳～中世	32 大元屋敷遺跡	古代～近世
11 植ノ内遺跡	古墳(末)～奈良	22 山崎遺跡	奈良～鎌倉	33 新居弁天寺遺跡	绳文・古代・中世

図4 図 周辺遺跡分布図

表1 周辺遺跡発掘調査一覧

遺跡名	調査名称	調査期間(現地)	調査面積	原因	調査主体
舞阪町天白	発見	1991年2月		下水道工事で採集	
	試掘調査	2007年5月29日	29m ²	小学校舎建設	浜松市教育委員会
	1次調査	2007年7月31日～2007年10月31日	882m ²	小学校舎建設 (財)浜松市文化振興財團	浜松市教育委員会
	2次調査	2012年8月3日～2012年8月21日	237m ²	放課後児童クラブ施設建設	浜松市教育委員会
弁天島湖底	1次調査	1967年4月3日～4月10日	220m ²	学術調査、町負担	舞阪町教育委員会
	2次調査	1975年4月9日～4月16日	149m ²	学術調査、町負担	静岡大学考古学研究室
大山1		1975年3月24日～3月27日	36m ²	学術調査、国庫補助	舞阪町教育委員会

表2 周辺遺跡関係報告書一覧

遺跡名	調査名称	発行者・著者	発行年・月	報告書名
舞阪町天白	発見	舞阪町立郷土資料館	1995年2月	「舞阪町立郷土資料館通信 第19号」
	試掘調査	浜松市教育委員会		成果は「舞阪町天白遺跡」に掲載
	1次調査	(財)浜松市文化振興財團	2009年3月	「舞阪町天白遺跡」
	2次調査	浜松市教育委員会	2013年3月	「舞阪町天白遺跡 2次」
弁天島湖底	1次調査	舞阪町教育委員会	1972年3月	「浜名湖海底遺跡発掘調査報」
	2次調査	舞阪町教育委員会	1984年7月	「浜名湖海底遺跡第2次発掘調査概報」
大山1	発見	舞阪町立郷土資料館	1995年12月	「大山1遺跡」
	調査	舞阪町	1989年	「舞阪町史」卷1
	遺跡の概説	向坂謙二	1982年3月	「舞阪をめぐる考古談議」「喜佐志講第四回」 舞阪町史研究会

第2章 調査成果

1 検出遺構

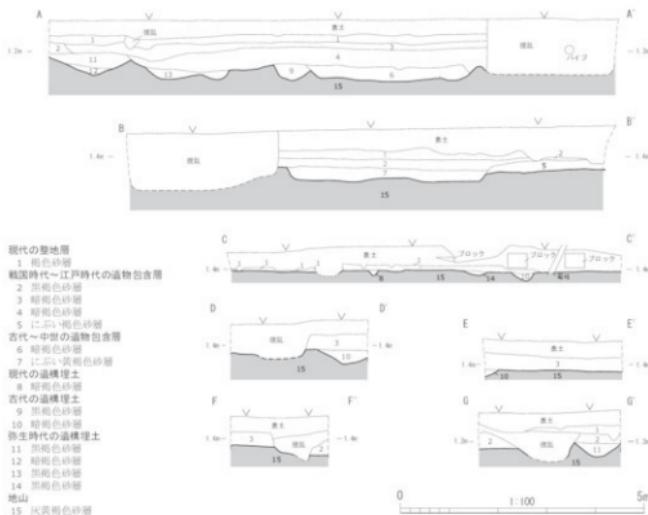
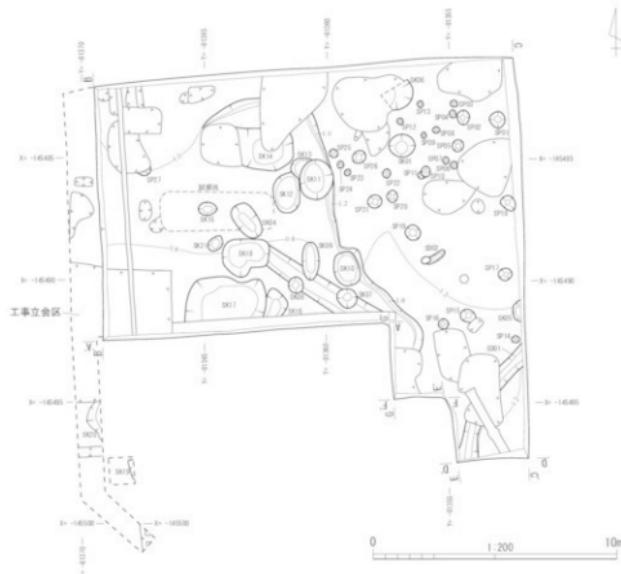
基本層位 今回の調査区壁面における土層観察結果を第6図に示した。調査区内における基本層位は、上から①表土（小学校校庭の整地層）、②現代の整地層（褐色砂層）、③戦国時代～江戸時代の遺物包含層（黒褐色砂層・暗褐色砂層・にぶい褐色砂層）、④古代～中世の遺物包含層（暗褐色砂層・にぶい黄褐色砂層）、⑤地山層（灰黄褐色砂層）の5層である。③・④層とも包含層であるが、③層内から出土した遺物量は多いことに対し、④層内からの遺物量は少ない。

また、1次調査と比較して、土層の堆積状況が異なっていた。今回の調査では、1次調査の時に確認された中世の遺構を覆う層は確認することができたが、7世紀後半と8世紀後半の遺構を覆う層は確認できなかった。

調査区の中央付近を境に、東側と比べ、西側の方が40cm程低くなる地山の段差が見られた。この段差を境として土層堆積状況が異なっている。調査区の西側では、①～④層のいずれの層も確認できたが、東側では、②層の直下もしくは、③層直下に⑤層が見られる。



第5図 調査区配置図



第6図 調査区全体図及び土層図

検出遺構の概要（第6図）調査区内を地山面まで掘削し、遺構検出をおこなった結果、溝・土坑・小穴を検出した。調査区内は、攪乱の影響を受けている所が随所に見られたが、調査区内のほぼ全域に遺構が展開しており、特に調査区中央付近では土坑、北東では小穴がまとまって検出された。だが、調査区中央付近で検出した遺構の中には、湧水の影響により遺構底面まで掘削できなかつたものもあった。

調査区の西から南西にかけて工事立会をおこなった。本調査区の西端に接したところでは、攪乱の影響を受けていたこともあり、遺構は検出できなかつたが、工事立会区の南で土坑を2基検出した。しかし、遺構が立会区外に及んでいたため全様は不明である。

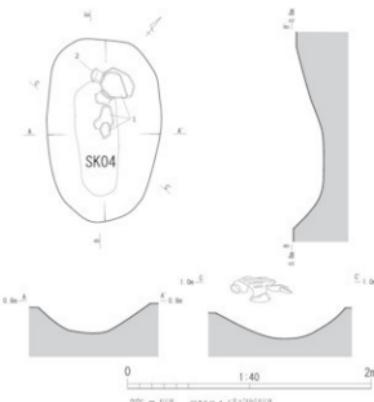
SK04（第7図）調査区の中央やや西で検出した土坑である。確認調査において、弥生土器の壺が2個体（第9図1・2）の上に1が重なった状態で出土した。1は、ほぼ完全な形に復元できたが、口縁の一部分等が出土しなかつたことから、埋設時には欠けていたと考えられる。SK04の平面形は長径150cm、短径95cmの楕円形をしている。検出面からの深さは、約25cm、埋土は、黒褐色砂である。埋土から壺の破片が数点出土したが、これらは確認調査で出土した壺と同一個体のものである。

SD01（第8図）調査区の南東隅において確認した溝である。現代の土管埋設時の掘削によって遺構の中央部は大きく攪乱を受けていた。溝は、攪乱の南側では南北方向に延びているが、攪乱内で屈曲していると考えられ、攪乱の北側ではやや東に進路を変えて延びている。また、両端とも調査区外へと延びているため全長は不明である。溝は幅約55cm、検出面からの深さは約30cm、埋土は暗褐色砂である。溝の埋土から須恵器の壺蓋と無台碗の底部（第9図4・6）が出土した。出土遺物から7世紀後半～8世紀前半の遺構と考えられる。

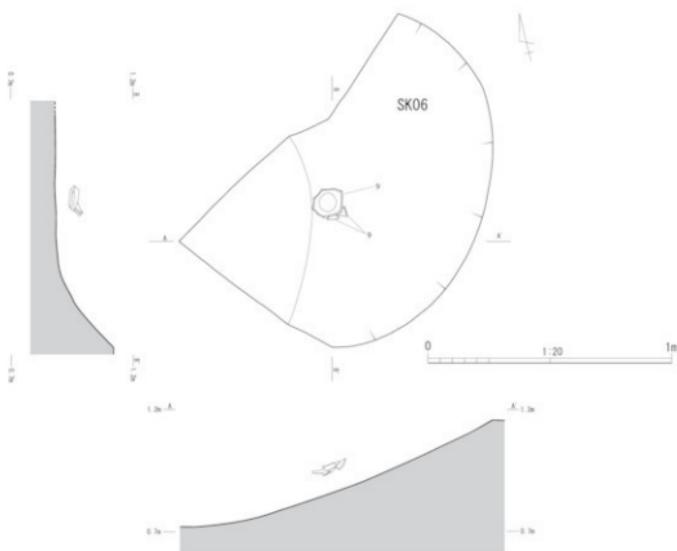
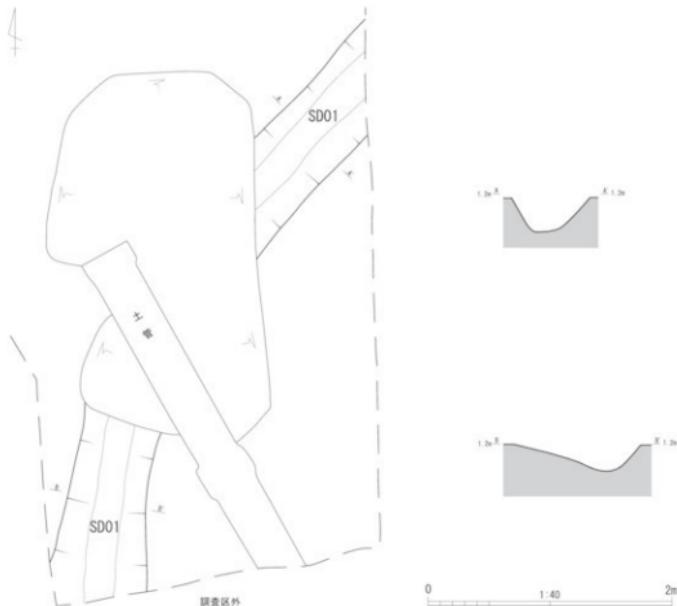
SK06（第8図）調査区北東において確認した土坑である。土坑は、攪乱によって大きく破壊されており、25%程の残存状況であったが、一部で底面を確認することができた。攪乱の影響を受けているため大きさと形状は不明であるが、検出面からの深さは約45cm、埋土は黒褐色砂である。土坑内の埋土から山茶碗2個体（第9図9・10）が出土した。出土遺物から13世紀の遺構と考えられる。

SK20（第6図）工事立会区において確認した土坑である。土坑の北側は攪乱の影響で破壊されており、また、調査区外へと遺構が及んでいるため、遺構の大きさと形状は不明であるが、底面を確認することはできた。検出面からの深さは、約50cm、埋土は暗褐色砂である。土坑内からは、羽付釜の口縁と土鍤（第9図12、第10図41～43）が出土した。出土遺物から16世紀の遺構と考えられる。

小穴群（第6図）調査区中央付近の段差の東側で多数の小穴を確認した（SP01～SP26）。小穴は、調査区の北東隅に集中して見られた。大きさは、直径約30cmのものと、直径約60cmのものがあり、前者の方が多く見られた。検出面からの深さは、15～20cmで、埋土は褐色砂である。小穴内からは、須恵器、近代の擂鉢、ガラス片などが出土した。校庭造成前の小穴と推定でき、現代の遺構と考えられる。



第7図 SK04実測図



第8図 SD01・SK06実測図

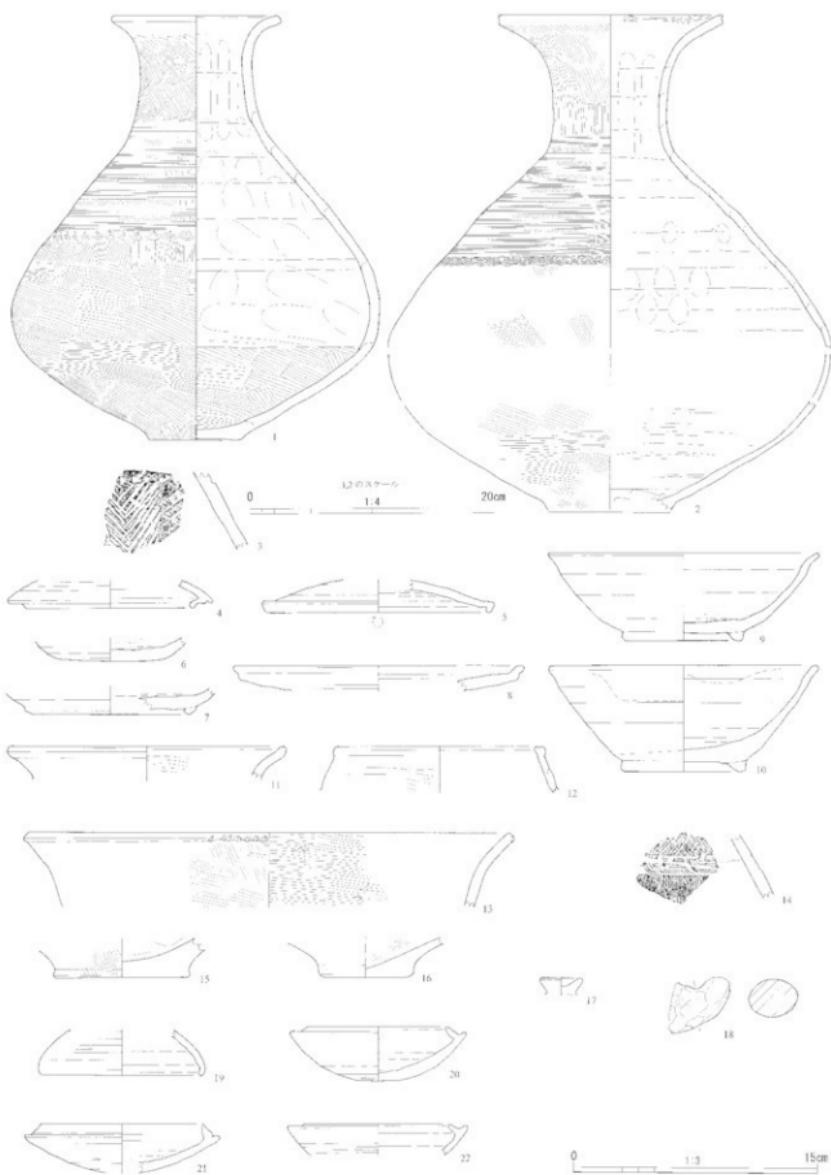
2 出土遺物

概要 今回の調査における出土遺物を第9図と第10図に示した。出土した遺物の多くは包含層からの出土であり、遺構からの出土は少ない。また、遺物の多くは、小破片であり、図示できなかった遺物が多い。以下に遺構、包含層、土製品・その他の遺物に分けて出土遺物の説明をしていく。

遺構からの出土遺物 遺構からの出土遺物を、1～12に示した。1はやや大型の壺である。外面全体はハケ、内面はナデとハケで調整されている。頸部から肩部にかけて、横線文と扇状紋が施されている。口縁部の一部は欠けているが、ほぼ完全な形に復元することができた。2は大型の壺である。体部中央は摩滅しているが、外面はハケ、内面はナデで調整されている。頸部から肩部にかけて、横線文と波状文が施されている。1・2は出土状況及び一部を意図的に破碎したことがうかがえることから、土器棺の可能性が考えられる。3は壺の体部である。3はやや粗いハケと斜格子文が施されている。これらの弥生土器は、区画沈線や研磨帯の欠落、文様帶の集約化と文様構成、肩部の間延び化といった特徴から弥生時代中期後葉の製品と考えられる。4～8は須恵器である。4は返り蓋で7世紀後半と考えられる。5は摘蓋、6は無台碗、7是有台环身、8は盤であり、8世紀の製品と考えられる。9・10は山茶碗である。高台が低い作りであることから13世紀の製品と考えられる。11は土師器甕の口縁部であり、7世紀の製品と考えられる。12は羽付釜の口縁部であり、16世紀の製品と考えられる。

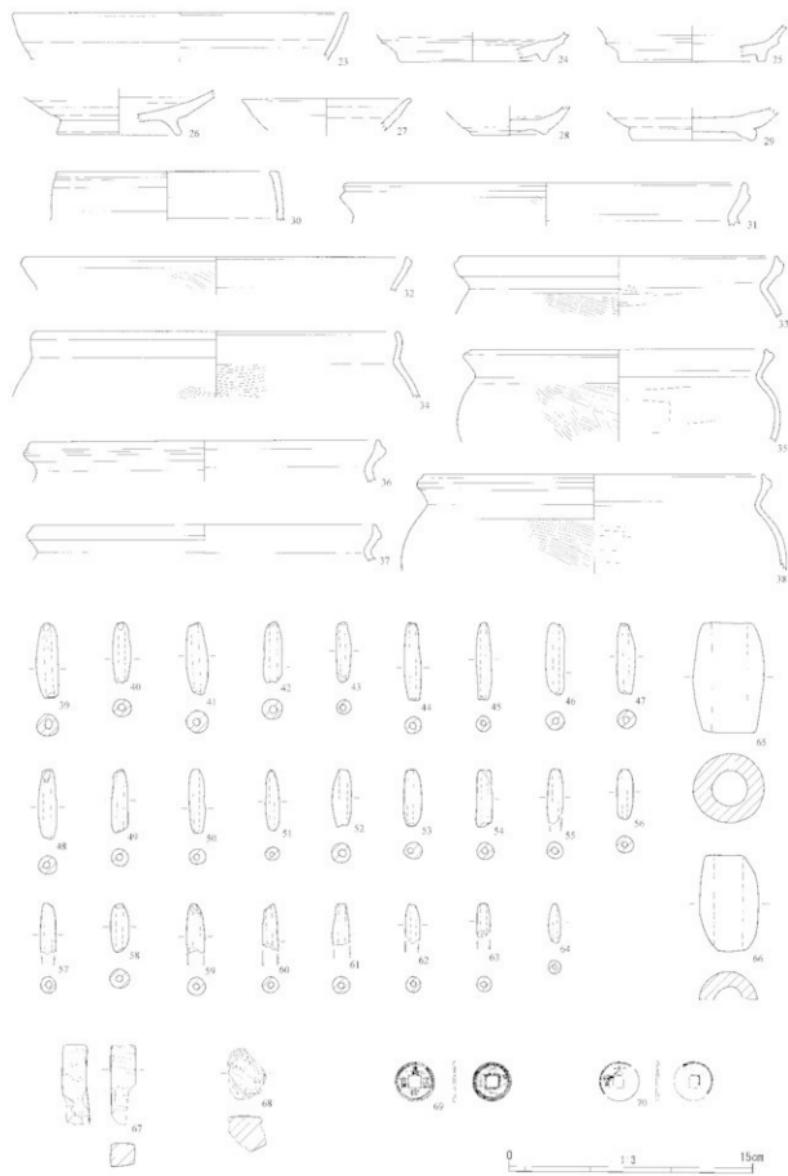
包含層からの出土遺物 包含層からの出土遺物を13～38に示した。13～16は弥生土器である。13は甕の口縁部、14は壺の体部、15・16は壺の底部である。13は外表面をハケで調整し、口縁部には刺突文が施されている。14は斜格子文と横線文が施され、横線文上には重複して扇状文が施されている。これらの弥生土器は破片であり全体形の分かるものはないが文様から弥生時代中期後葉の製品と考えられる。17は須恵器の有蓋高环の蓋であり、6世紀代の製品である。18は土師器の把手である。残存状況が悪いため鉢か甕かは不明である。19～25は須恵器である。19は环蓋、20～22は环身である。形態的特徴から7世紀中頃～後半の製品と考えられる。23～25は有台环身である。23は口縁部でかなり大型のものである。形態的特徴から8世紀代の製品と考えられる。26は灰釉陶器の碗である。調整技法や高台の形状からみて、10世紀の製品と考えられる。27～29は中世陶器である。27は小皿、28は小碗、29は山茶碗である。28・29は高台が低く、扁平な作りをしていることから13世紀の製品と考えられる。30は羽付釜の口縁部、31～38は内耳鍋の口縁部である。内耳鍋の多くは外表面はハケ、内面はハケかナデで調整されており、スヌの付着がみられるものもある。羽付釜と内耳鍋は16世紀の製品と考えられる。

土製品・その他の出土遺物 土製品・その他の出土遺物を39～70に示した。なお、39～43までは遺構から出土した遺物であり、44以降は包含層から出土した遺物である。39～64は土錘である。39～43は、共伴遺物として内耳鍋の破片が出土しており、16世紀の製品と考えられる。また、44～64は16世紀の遺物を多く含んだ包含層から出土していることから、同時期のものと考えられる。67・68は砥石であり、68は軽石製のものである。双方とも時期は不明である。69・70は古錢である。69は北宋錢の「嘉祐通寶」であり、初鑄年は1056年である。70は残存状態が悪く半分のみしか残っていなかったが、「大□□寶」と読める。書体から「大觀通寶」(北宋錢 初鑄年 1107年)の可能性が高いが確定的ではない。



第9図 出土遺物（1）

1・2: SK04 3: SK05 4・6: SD01 5: SK01 7: SK10 8: SK11 9・10: SK06 11: SK14 12: SK20



第10図 出土遺物(2)

39・40: SK17 41~43: SK20

表3 出土遺物観察表

回収No	No	出土No	遺物	種別	細別	残存%	反転	器形	器高cm	口径cm	底径cm	縦径cm	横径cm	色調	その他
9	1		S K 04	弓削土器	直	90		30.2	35.0	14.0	7.6	9.3	に赤い鶴	模擬文5本7段	
9	2		S K 04	弓削土器	直	20	反	36.6	(41.0)	18.4	(30.0)	9.3	に赤い鶴	模擬文9本9段	
9	3	49	S K 05	弓削土器	直	10以下								に赤い鶴	
9	4	2	S D 01	須吏器	返り蓋	10以下	反	12.6		10.3				灰白	
9	5	12	S K 01	須吏器	縫蓋	10以下	反			14.2				灰白	
9	6	47	S D 01	須吏器	無台輪	10	反				6.5			灰白	
9	7	35	S K 10	須吏器	有台輪身	10以下	反				10.5			灰白	
9	8	36	S K 11	須吏器	盤	10以下	反		17.8					灰白	
9	9	533	S K 06	中空陶器	山形碗	50	一部反		5.4	16.7	7.4			灰白	系切 内面自然釉?
9	10	1,533	S K 06	中空陶器	山形碗	50	一部反		6.5	16.6	7.7			灰白	山形部内外面釉有毛三痕?
9	11	37	S K 14	土師器	甕	10以下	反		17.2			14.0		に赤い鶴	
9	12	64	S K 20	土師質土器	羽付釜	10以下	反			13.1				黄褐	
9	13	57	包合層	弓削土器	甕	10以下	反			30.0				に赤い鶴	
9	14	24	包合層	弓削土器	直	10以下								淡黄	
9	15	14	包合層	弓削土器	直	10以下	反				8.4			に赤い鶴	
9	16	30	包合層	弓削土器	直	10以下	一部反				5.9			稍	
9	17	25	包合層	須吏器	有蓋環蓋	10以下								灰	横幅2.7cm 橫高1.1cm
9	18	7	包合層	土師器	把手	10以下								に赤い鶴	
9	19	63	包合層	須吏器	环邊	10以下	反	10.3		10.1				灰白	
9	20	1	包合層	須吏器	环身	20	反	10.8	3.3	8.8				灰	
9	21	29	包合層	須吏器	环身	20	反	12.0		10.2				灰白	
9	22	41	包合層	須吏器	环身	10以下	反	11.1		8.9				灰白	
10	23	54	包合層	須吏器	有台輪身	10以下	反			20.6				灰白	
10	24	51	包合層	須吏器	有台輪身	10以下	反				9.2			灰白	
10	25	29	包合層	須吏器	有台輪身	10以下	反				9.1			灰白	
10	26	46	包合層	灰陶須吏器	甕	10以下	反				7.7			系切 内面自然釉	
10	27	52	包合層	中空陶器	小甕	10以下	反		10.5					灰白	
10	28	7	包合層	中空陶器	小甕	10					4.8			灰白	内面釉有
10	29	1	包合層	中空陶器	山形碗	10以下	反				7.8			灰白	
10	30	24	包合層	土師質土器	羽付釜	10以下	反				13.7			灰白	
10	31	51	包合層	土師質土器	内凹罐	10以下	反				25.2			浅黄褐	
10	32	4	包合層	土師質土器	内凹罐	10以下	反				24.0			浅黄褐	外面スズ付着
10	33	29	包合層	土師質土器	内凹罐	10以下	反				20.2			浅黄褐	外底スズ付着
10	34	29	包合層	土師質土器	内凹罐	10以下	反				22.8			浅黄褐	[内底]外底スズ付着
10	35	59	包合層	土師質土器	内凹罐	10以下	反	19.8			19.1			に赤い鶴	内底スズ付着
10	36	7	包合層	土師質土器	内凹罐	10以下	反				22.2			浅黄褐	外底スズ付着
10	37	59	包合層	土師質土器	内凹罐	10以下	反				21.7			淡黄	外底スズ付着
10	38	59	包合層	土師質土器	内凹罐	10以下	反	23.6			21.7			に赤い鶴	外底スズ付着
10	39	50	S K 17	土製品	土鉢	100			1.3	4.6	1.3			明赤褐	6.6 g
10	40	50	S K 17	土製品	土鉢	90			1.1	3.7	1.1			に赤い鶴	31 g
10	41	64	S K 20	土製品	土鉢	100			1.3	4.4	1.3			灰黄褐	6.1 g
10	42	64	S K 20	土製品	土鉢	90			1.2	3.7	1.2			に赤い鶴	4.5 g
10	43	64	S K 20	土製品	土鉢	100			0.9	3.7	0.9			明赤褐	2.1 g
10	44	29	包合層	土製品	土鉢	100			1.1	4.7	1.1			に赤い鶴	4.4 g
10	45	63	包合層	土製品	土鉢	100			0.9	4.7	0.9			相	3.3 g
10	46	29	包合層	土製品	土鉢	100			1.1	4.4	1.1			に赤い鶴	4.2 g
10	47	59	包合層	土製品	土鉢	100			1.1	4.3	1.1			に赤い鶴	4.2 g
10	48	1	包合層	土製品	土鉢	100			1.1	4.3	1.1			に赤い鶴	3.9 g
10	49	51	包合層	土製品	土鉢	100			1.0	3.9	1.0			黒褐	3.3 g
10	50	63	包合層	土製品	土鉢	100			1.0	3.9	0.9			に赤い鶴	3.2 g
10	51	59	包合層	土製品	土鉢	100			0.9	3.7	0.8			に赤い鶴	2.2 g
10	52	59	包合層	土製品	土鉢	90			1.2	3.6	1.2			に赤い鶴	3.4 g
10	53	26	包合層	土製品	土鉢	100			1.1	3.5	1.0			に赤い鶴	3.8 g
10	54	7	包合層	土製品	土鉢	90			1.0	3.5	0.9			に赤い鶴	3.3 g
10	55	18	包合層	土製品	土鉢	70			1.1	3.4	1.0			に赤い鶴	2.3 g
10	56	18	包合層	土製品	土鉢	100			1.0	3.1	1.0			灰褐	2.9 g
10	57	7	包合層	土製品	土鉢	60			1.0	3.1	1.0			に赤い鶴	2.3 g
10	58	63	包合層	土製品	土鉢	100			1.2	3.0	1.2			に赤い鶴	3.6 g
10	59	25	包合層	土製品	土鉢	60			1.1	3.0	1.1			に赤い鶴	2.8 g
10	60	7	包合層	土製品	土鉢	50			1.0	2.9	0.9			灰褐	2.0 g
10	61	26	包合層	土製品	土鉢	50			1.1	2.6	1.0			に赤い鶴	2.2 g
10	62	41	包合層	土製品	土鉢	40			0.9	2.5	0.9			に赤い鶴	1.5 g
10	63	18	包合層	土製品	土鉢	40			0.9	2.1	0.9			に赤い鶴	1.4 g
10	64	1	包合層	土製品	土鉢	100			0.8	2.4	0.8			に赤い鶴	1.3 g
10	65	46	包合層	土製品	陶鉢	100			4.3	6.7	4.2			に赤い鶴	320 g
10	66	45	包合層	土製品	陶鉢	40			3.6	5.9				赤褐	30 g
10	67	18	包合層	石製品	砾石				1.5	4.9	1.5				14.8 g
10	68	59	包合層	石製品	砾石				2.3	3.1	2.2				3.6 g 輻石
10	69	19	包合層	青銅製品	銅貨	100			2.5		0.1				3.4 g 「嘉祥寶」宋
10	70	9	包合層	青銅製品	銅貨	50		(2.5)			0.1				1.5 g 「大工寶」宋

器径= 幅 器高= 長さ 口径= 周辺

第3章 総括

今回の舞阪町天白遺跡の発掘調査では、弥生時代中期後葉～近世までの遺構が確認された。遺物は戦国時代のものが中心を占めているが、その他の時代の遺物も出土した。このことから、舞阪町天白遺跡では長期に渡り、人々の生活が営まれてきたことが明らかとなった。以下に、時代ごとにまとめを行い、総括としたい。

弥生時代 今回の調査では、土坑内（SK04）から土器棺と考えられる弥生時代中期後葉の壺（第9図1・2）が出土したことが注目される。SK04の南東において溝（SD03）が確認されたことから、当初、方形周溝墓の可能性を想定したが、SD03以外に溝が確認されなかったため、方形周溝墓の可能性は低いと考えられる。また、今回の調査において、住居跡と考えられる遺構が確認されないこと、出土した遺物が少なかったが、甕などの生活道具がほとんど出土しなかったこと、出土した壺が一部を意図的に破碎したと考えられることから、土器棺の可能性が高いと判断した。よって、今回の調査区は当時、墓域であったと考えられる。

舞阪町天白遺跡から 500m 程東に位置する白石山遺跡では、1966 年に土地改良工事の作業中に、弥生土器の壺と鉢が重なった状態で発見されており、出土状況から土器棺の可能性が高いとされている。出土した弥生土器は、今回の調査で出土した土器棺と考えられる弥生土器の壺と同時期のものである。しかし、両遺跡は距離が離れていることから、一つの墓域として考えるのはやや困難である。また、白石山遺跡と近接した亀ヶ原遺跡からも両遺跡と同時期の土器が出土しているが、発掘調査はされておらず、当時の舞阪町天白遺跡周辺の様相は判然としていない。今後、さらなる発掘調査や周辺遺跡との関係性を含めて検討していく必要がある。

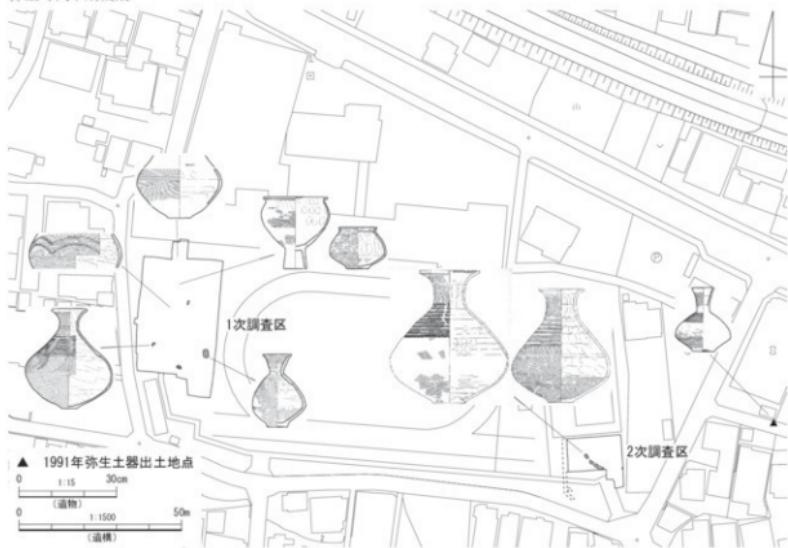
古代 今回の調査において溝と土坑を確認した。1次調査の際には多くの 7～8 世紀代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が確認され、集落が展開していたことが明らかとなった。しかし、今回の調査で確認された遺構からは、住居跡を想定できる遺構の並びや、カマド跡を確認することはできなかった。このことから、今回の調査区は集落の縁辺部にあったと考えられ、古代における当遺跡の中心は今回の調査区より西にあったと推測される。

平安時代の遺物は、包含層より出土した灰釉陶器の碗（第10図26）のみであり、遺構は全く確認されなかった。1次調査の際にも平安時代の遺物は僅かしか確認されていないことから、当遺跡において遺構や遺物が希薄な時期と考えられる。

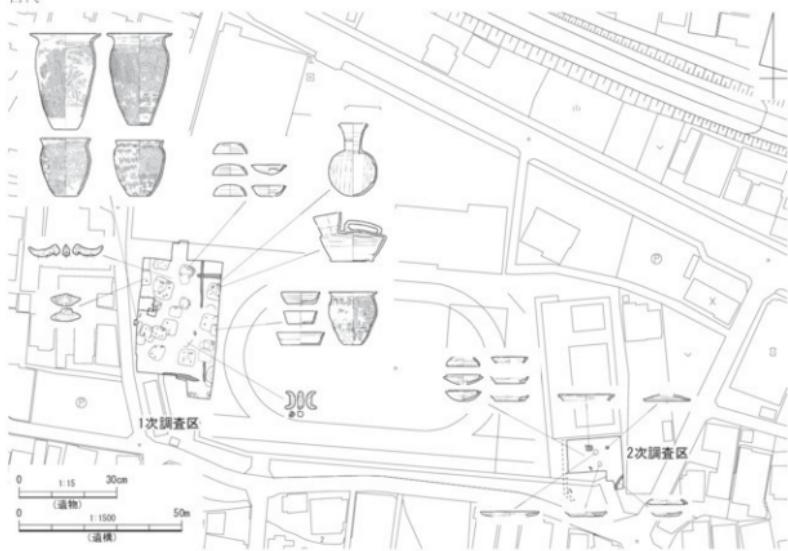
中世 鎌倉時代の遺構は土坑（SK06）が 1 基確認されたのみであった。SK06 からは山茶碗（第9図9・10）が出土したが、後世の搅乱を受けており、遺構の大半は失われていたため性格は不明である。また、その他の遺物も極めて少ないとから、平安時代～鎌倉時代にかけて遺構・遺物が希薄な時期が続いていたと考えられる。

戦国時代の遺構・遺物は今回の調査において最も多く確認された。遺物の中心は、内耳錐と土錐であり、多くの土錐が出土したことは、当時の舞阪地域において漁業が盛んにおこなわれていたことをうかがわ

弥生時代中期後葉

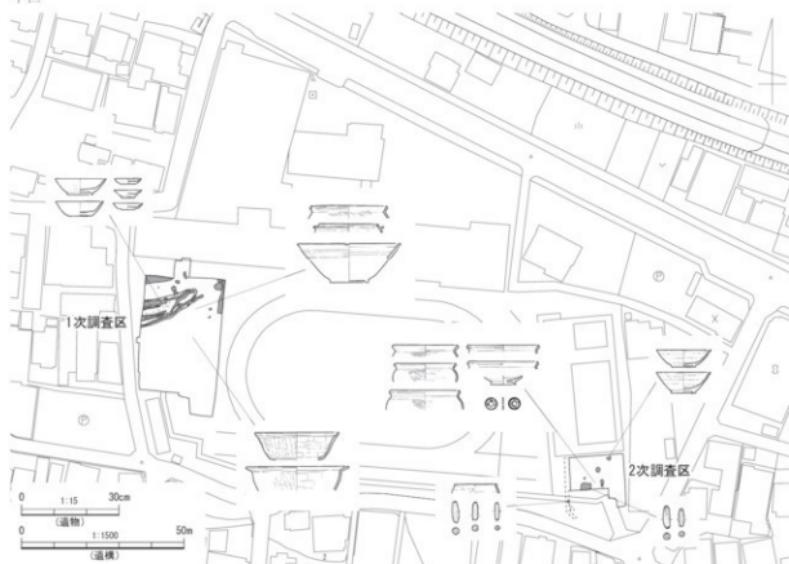


古代



第11図 舞阪町天白遺跡の変遷(1)

中世



第12図 舞阪町天白遺跡の変遷(2)

せる。しかし、出土した遺物の多くは包含層からのものであり、遺構内からの出土は少なく、遺構の性格を示すのは困難である。

舞阪町天白遺跡の南には旧東海道が走っており、さらに、その南に位置する仲町遺跡から戦国時代の遺物が採集されている。今回の調査において確認された遺構は、性格の判明したものではなく、建物跡と推定できる遺構も確認できなかったことから居住域の可能性は低い。また、1次調査の際には、明確な遺構は確認されていないが、包含層より遺物が出土している。このような状況を踏まえると、舞阪町天白遺跡周辺には、中世における旧東海道沿いの集落が展開されており、舞阪町天白遺跡はその集落の縁辺部であったと考えられる。

参考文献

- (財)浜松市文化振興財団 2009 『舞阪町天白遺跡』
舞阪町 1989 『舞阪町史 上巻』
舞阪町立郷土資料館 1992 『舞阪町立郷土資料館通信 第1号』
舞阪町立郷土資料館 1995 『舞阪町立郷土資料館通信 第19号』
舞阪町立郷土資料館 1995 『大山I遺跡 舞阪町立郷土資料館資料集 第3集』



調査区全景（北西から）

図版 2



1 調査区全景（南東から）



2 調査区全景（北東から）



1 SD03 摂削前



2 SD03 摂削後

図版4



1 SK04 (北から)



2 SK06 (北東から)



3 カキ貝塚 (北西から)



4 ハマグリ貝塚 (北西から)



1 SD04 出土遺物

1

2



2 遺構等出土遺物

SD06 9

SD06 10

図版 6



1 出土土錘



2 包含層出土遺物（中世）

報告書抄録

舞
阪
町
天
白
遺
跡
2
次

舞阪町天白遺跡 2 次

2013 年 3 月 29 日発行

編集機関 浜松市教育委員会

浜松市市民部文化財課

(浜松市教育委員会の補助執行機関)

〒 430-0946 浜松市中区元城町 103-2

印 刷 中部印刷株式会社